

産業能率大学

→ SANNO UNIVERSITY

日本の高大接続と アクティブラーニング普及を 常に牽引

毎年、全国から高校の先生方が集結するフォーラムがある。それが2015年に第9回を迎えた産業能率大学アクティブフォーラムだ。テーマは高大接続とアクティブラーニング。東京、名古屋、京都で開催され、全国から800名を超える参加者の熱気にあふれた。昨今の安易に流れがちなアクティブラーニング・ブームとは一線を画した、質の高い講演と議論をレポートする。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野伸一郎



アクティブフォーラム（東京会場） 模擬授業の様子

なぜアクティブラーニングが 必要なのか

溝上慎一先生（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）からの講演は、アクティブラーニングの意義についてである。

「受験の成績を上げていくためだけであれば、アクティブラーニング以外の方法もあると思います」としたうえで、なぜアクティブラーニングが必要なのかを次のように明確化する。すなわち、学校から仕事社会へのトランジション（移行）への対応こそが主となる目的であり、「トランジションを考えるとアクティブラーニング以外の選択肢はない」と。

アクティブラーニングで成績が上がるのか、という疑問が投げかけられることが多いが、成績向上だけでなく他の方法でも実現可能である。そもそも、成績の向上という目標が1つの教育手法だけで達成できると考えてしまうことに問題がある。

現在、主要な問題とされている学力の3要素とは、①「知識・技能」、②「思

考力・判断力・表現力」、③「主体性・多様性・協働性」であるが、①はともかくとして②と③について一方向的な講義だけでどのように育成することができるのか。ここにアクティブラーニングの必然性があるのだと指摘する。

大切なことは、各教科の習得・活用の学習にアクティブラーニングを導入して、さらに、脱教科型の探究や課題研究を通して、思考力・判断力・表現力を伸ばすことである。教科学習と探究学習とがバランスよく統合され、それらの力を伸ばしていくことが重要だと指摘している。

パフォーマンス評価と学力の3層

アクティブラーニング型授業を取り入れると、必ず突き当たるのがいかに評価するか、である。石井英真先生（京都大学大学院教育学研究科准教授）の講演テーマは、パフォーマンス評価についてだ。

まず評価と教育目標との関係について、「評価方法を工夫するということは、何らかの形で目標や育てたい能力を明

確にしておく必要があります」と指摘する。そして、テストなどの従来型の評価方法は、いわば実験室の研究のようなものであり、評価の方法やタイミングを固定して、そこから判別できるものだけを評価していた。しかし、パフォーマンス評価は、学習者が実際に力を発揮している場面に評価のタイミングや方法を合わせるものである。バスケットボールに例えると、ドリブルやシュートだけを練習させ、そこだけを切り取って評価しようとするのが従来の方法であり、実際の試合の中で能力を高め、そこでのパフォーマンスを評価することが重要であるという。

もう一つのテーマは、学力の3層についてである。最下層の次元では知識・技能を「知っている・できる」があり、それを含みつつその上位に「わかる」が、さらに最上位の層に「使える」が位置する。従来型の客観テストで測定可能なのは「知っている・できる」の次元であり、「わかる」に対応したのものとしては知識同士のつながりを試す必要が生じる。まして、知識を使ったり創造したりする「使える」次元は、実際にそれをやらせてみてパフ



京都大学
高等教育研究
開発推進センター
教授
溝上慎一氏



京都大学
大学院
教育学研究科
准教授
石井英真氏

学力の3要素を課題探究学習で 育成する京都市立堀川高校 生徒による事例報告

京都市立堀川高校は1999年に日本で初となる探究科を創設し、その1期生が卒業する2002年には、国公立大学の現役合格者を前年の6人から106人にまで急増させ、「堀川の奇跡」と呼ばれたことはよく知られている。

京都のフォーラムでは、探究活動を支える探究基礎委員会の生徒から学ぶ側からの探究活動の意義と成果について発表もあった。

探究基礎はHOP・STEP・JUMPの3段階で設計されており、1年前期のHOPでは、探究の「型」を学ぶ。論文の形式・書き方、情報収集の方法、論文作成の実習に取り組む。1年後期のSTEPでは、探究の「術」を身につける。分野ごとの少人数ゼミに配属され、実験技能やデータ分析、文献収集・講読、レポート作成法を学ぶ。そして2年前期のJUMPでは探究の「道」を知る。探究活動を実践し、個人で研究テーマを設定し、研究計画を立案して、必要な知識・技法は自分



で習得してポスター発表を行い、そこで感じた不十分な点などを修正して論文を作成する、というプロセスである。

また、フォーラムでは堀川高校生徒有志19人によるポスター発表も行われた。探究基礎で実際に行われたポスター発表の再現であり、社会科学、言語文学、国際文化、情報科学、生物、化学などのゼミテーマ別で行われる発表に対して参加者の高校教員からは多数の質問が出されたが、生徒たちが物おじせず堂々と答えていたのが印象的であった。

この生徒たちの探究基礎に関する発表とポスター発表から、教科で学んだ知識を探究活動の中で活用させ、自ら問いを立たせ、問題解決するという学習スタイルが確立していることがよくわかる。思考力、表現力ももちろんだが、なに

パフォーマンス評価を行うしかない。

また習得・活用・探究との関連でいえば、学力の3層すべてにおいてアクティブラーニングは重要だが、特に「使える」次元の学力を育てる「活用」型学習、さらには「探究」活動においては、それ以外の授業形態は考えられない。そして、いかに教科や総合における探究的な学びを豊かにするかが高校教育では大きな課題となっている。

富士市立高校生の自由が丘フィールドワークをSANNIO生がファシリテート

2015年、静岡県富士市立高校総合探究科1年生120人が、産業能率大学に勢ぞろいした。「本校は設立のコンセプトで、地域創生を担う若者の育成を目指しており、探究型のアクティブラーニングを実践しています。今回の目的は、東京の人気の街・自由が丘をフィールドワークし、富士市の活性化に活かせることを考えて地元提案しようという狙いです」と語るのは、引率した富士市教育委員会 指導主事の眺野大輔氏。

迎えるのはSANNIO生40人で、生徒5～6人の班に2人の大学生がつく。生徒たちはまず、事前に自由が丘について調べてきたことを共有し、富士市にも自由が丘にもあるお店をエリアマップで調べる。その後街に出てフィールドワークを行い、再び大学でKJ法を使って調査内容をまとめ、ポスターセッションを行った。

「地元の食堂チェーン店では駐車場があつて店舗も広いのに、自由が丘では駐車場もなくカウンターだけ。自動ドアも地元では両開きだけど、自由が丘では片開きとか、私たちがあまり気づかなかったような視点で分析しているのが新鮮でした」とファシリテーターを務めた兒玉さん（現代ビジネス学科1年）。

「自分が大学でアクティブラーニングを通して成長できたので、その経験を活かして班での討論が活発化するよう心がけました。ある男子生徒が最初は無口だったのに、後半は見違えるように変わってよく発言し、班全体が活発になったのが嬉しかった」と朝日さん（マーケティング学科1年）。

高校生は大学の学びを実感し、大学生は自分が学んだことを高校生に示すことで、両者にとって新鮮な学びの詰まった1日となった。



あさひ ちくる
朝日千尋さん
経営学部
マーケティング学科1年



こだま なおき
兒玉直樹さん
経営学部
現代ビジネス学科1年



プレゼンテーション時に作成したポスターの一部



よりも主体性の高さに目を見張るものがあった。

19人は自ら希望してこのポスター発表に臨んでいたのだが、そう希望した理由を問われると「フォーラム参加者からの質問に答えることで、学校内での発表時とは違う視点に出会い、自分の研究をさらに高めることができると考えたから」という答えがあり、こうした姿勢が参加者を感動させたと思う。

地域連携の事例報告や 模擬授業も活発に

アクティブフォーラムでは、地域連携も大きなテーマになっている。青森県立弘前高校の千葉栄美教諭からは、青森県の高校教員のネットワークが形成されてきていることが報告された。

また岐阜県立可児高校の浦崎太郎教諭からは、習得におけるアクティブラーニングを軸としつつ、探究活動は地域と

連携し地域を舞台に実現するという、堀川高校とは異なるアプローチでの取り組みが報告された。

加えて、同フォーラムではアクティブラーニング型の模擬授業が活発に行われている。名古屋会場では岩手県立大野高校の下町壽男校長（前盛岡第三高校副校長）による数学、岡山県立玉島商業高校の三浦隆志校長による日本史の模擬授業が、東京会場では全国のアクティブラーニング型授業実践者13名による10教科の模擬授業が行われた。

自立した人格の形成を 忘れてはならない

フォーラム紹介の最後に、安彦忠彦先生（神奈川大学特別招聘教授）の講演に触れておきたい。同教授は次期学習指導要領改定のための有識者会議座長を務めたが、その見直しのポイントは、「これまでは、学習指導要領は育成すべき資質・能力よりも、内容についての記述がほとんどでしたが、これを資質能力→内容→評価という流れに変更しようとしている点です」と明らかにする。その上で、アクティブラーニングに留意することと、教科を相互に関連付けるカリキュラムマネジメントの重要性が盛り込



神奈川大学
特別招聘教授
安彦忠彦氏

まれていることを指摘する。

最も印象的だったことは、「子どもに未来決定の自由を認めるべきだ」という提起である。現在の国家にとって都合のいい人材を育成するのではなく、次の社会をつくる自由を子どもたちに認めること。そのためにさまざまな能力を身につけさせることは重要だが、そうした能力をいかに用いるかを決定するのは「人格」であり、その人格の自立を教育は射程に入れなければならない、と提起する。能力のみが強調されるコンピテンシーベースの教育観をも超えていくことが重要だという指摘は、参加者に大きな問題を投げかけるものとなった。

アクティブラーニングへの注目が高まる中で、「グループで何かをやらせておけばいい」という風潮も一部では生まれているが、そんな懸念を吹き飛ばすようなレベルの高い講演や報告、ワークショップが繰り広げられた産業能率大学のアクティブフォーラムであった。

COLUMN

沖縄県石垣市（石垣島）と 連携したPBL 「地域創生プロジェクト」 を複数科目に展開。

美しいサンゴ礁に囲まれた沖縄県石垣市と連携したアクティブラーニング型科目「地域創生プロジェクト」が、2016年度から産業能率大学経営学部で始まる。亜熱帯に位置する石垣市には、日本有数の美しいサンゴ礁をはじめとする観光資源が豊富にあり、コーヒーやバナナな

どを栽培していることは、全国にはあまり知られていないが、限りないポテンシャルを有している。マラソンやトライアスロン、ダイビングなどのスポーツイベントの開催地としても魅力的であり、音楽フェスティバルなどの候補地としての可能性も秘める。そんな石垣市を、地元産のコーヒーを切り口として東京や全国の人々に売り込み、多くの人に現地に足を運んでもらう。そんな企画を学生たちが練り上げ創造するプロジェクトである。

しかも、このプロジェクトに関わる科目は1科目だけではない。1年次の「基礎ゼミ」、2年次の「ブランドプロデュース」、「自由が丘イベントコラボレーション」、3年次の「マ

ーケティングプロジェクト」、「自由が丘&地域再生プロジェクトユニット」等の多数の科目へと展開される。しかも学生の企画案を石垣市の方々に評価してもらい、その中で実現可能なプランは実際のビジネスへと発展する可能性ももっている。

教育面で注目されるのは、複数の科目で展開され、学生は異なる切り口ではあれ、同じテーマに何度も取り組む点だ。1年次での取り組みと2年次、さらに専門知識をより多く学んだ3年次での取り組みは、自己のレベルの進化をメタ認知する機会ともなり、より多くの教育効果が期待されている。

他の大学でも例を見ない先進的な取り組みである。